人の世に熱あれ　人間に光りあれ !!　　発行人　牧坂秀敏・小宮　豊

人権相談員便り［結い］

あなたの人権は保障されていますか？　一人で悩まずにお気軽にご相談ください。

超高齢社会がすすむなかで、潜んでいる危機にどう向き合うのか。あなたの家族は大丈夫ですか。

現実を直視し、明日の暮らしを考える！

◆老親の相談から明らかに

かねて、『結い』では、都営住宅の入居継承資格（原則として名義人の配偶者のみ）に関わって、引きこもりの子どもの問題を扱ったことがありました（第25号）。また、中高年の引きこもりが社会的にクローズアップされるなかで、かれらの社会的経済的な自立支援に取り組んでいる秋田県藤里町社協の活動を紹介しました（第29、32号）。

どちらも問題が表面化したのは、老親自身の高齢化あるいは要介護状態に直面し、「私（たち）が死んだら、どうなるんだろう」と、同居する引きこもりの子どもたちの将来を心配する老親からの相談がきっかけでした。超高齢社会が次から次に難題を突き付けてきます。

去る８月３０日、「戦争法案廃案！安倍政権退陣！」と国会周辺に老若男女１２万人が集まり声を上げた歴史的な闘いの日ですが、その夜にＮＨＫスペシャルという番組で「老人漂流社会－親子共倒れを防げ」が放映されました。

年金で暮らす高齢者の親が中高年世代の子どもを養いながら、同居する親子が経済的に追い込まれてやがて共倒れの危機に直面するという現実を追ったものです。地方都市の話として取り上げられていましたが、東京でも然り、身近なところでそうした危機が潜んでいます。それは、実際に相談を受ける中で、痛切に感じることです。

都営住宅の場合だと、世帯主が亡くなると、同居している子どもには継承権がありませんから、すぐさま住むところを失います。長期の引きこもりなどで老親へ経済的に依存していると、引っ越し費用さえもままならず、路頭に迷うこととなります。

一方、老親の介護が必要となり、子どもが仕事を辞めて介護に専念するといった介護離職の場合などは、まさに経済的にも追い詰められて「共倒れ」の危機に直面することになります。

◆関係機関と連携した取り組みで課題解決を

前者のケースは、切羽詰まってからでは手の打ちようがありません。いままでの生活がこれからも同じように続くという保障はないのです。真剣に将来の生活を考えていかなくてはなりません。予想される事態から目をそらさずに向き合うなかで、中高年世代の子どもたちが経済的にも自立した生活を確立していくために、どんなサポートが可能なのかを当該の家族と一緒に考えていきます。すぐには解決できなくても、少しずつでも現状から脱却していく粘り強い取り組みが求められます。それは、単に家族と相談を受けた者だけではなく、さまざまな社会資源、たとえば保健・医療や福祉あるいは就労に関わってはハローワークなどの関係機関と連携・協力しながらすすめていくことが肝要であり、具体的解決策に結びついていきます。

ここでは、将来に危機感を持つ老親がキーパーソンですが、決して一人で抱え込まない。抱え込んで解決できる状況にはありません。いや、解決できないからこそ、危機感を抱くような状況を迎えているわけです。「自分の家族の問題を外部に言うのは……」と躊躇していると、問題は先送りになるばかりではなく、解決への道筋がより困難に

なっていくことが考えられます。

実際に、働く意欲がある場合などは、就労相談で本人の意向を尊重して、本人に合った就労に結びつくような寄り添い型の支援を、ハローワーク等を活用しながら行うこともできます。

一度試みて無理だったからといってあきらめてはいけません。本人がほんとはどんな気持ちでいるのか、そのあたりの本音を聞き出すのは、案外、家族ではないほうがいいかもしれません。

本人との信頼関係を構築しながら、関わり続けていくなかで、いろんな面も見えてくるでしょう。

◆共に支え合うコミュニティづくりを

後者については、やはり周囲の人たちが本人たちの悩みに気軽に乗って上げられる共に支え合う関係づくり、あるいは、なんでも相談でき、気軽に寄れてほっとできるような（居）場所が身近にあると、どんなに心強いことでしょう。もちろん、そこが情報収集の拠点となって、たとえば、地域包括支援センターや福祉事務所など関係機関につなぐ役割を果たします。なかなか個人でＳＯＳを出せないでいる人が多いわけで、それをキャッチできるコミュニティの形成が不可欠です。「おせっかいな人」が求められている時代です。このような取り組みは、近年急増している「孤独死」を防ぐことにもつながっていきます。

「老人漂流社会」を制作したプロデューサーは「現実を知ることで、ひとりひとりの方が自身や家族の老後を直視し、自分たちで何か備えることができるかも知れない。…地域の単位、あるいはもっと小さな隣近所の単位でも、こうした事態に対して何かできることはないか、支え合うために何ができるか。この番組をきっかけに、そうしたことを考える出発点にしていただければ」とその制作の意図を語っています。

◆独居高齢者の変化には早期発見・早期対応を

一方、独居高齢者や高齢世帯も増加しており、「家族の立場から、一人暮らしの高齢者問題にどう対応するのか」ということで、筆者の義母（80歳）に関わる話を取り上げました（52号）。遠方で元気に一人暮らしをしていた義母が風邪をこじらせて、病状が悪化。心身のバランスを崩して、生活が一変します。「これはやばい！」と、急遽、東京に連れてきて同居を始めました。毎日、室内を歩きまわり、ため息とともに口を衝いて出てくる言葉は「死にたい」の一言。もう一人では暮らせないと訴えます。うつ病を患っていたのです。

その後、義母はどうなったのか。まずうつ病ですが、その回復に取り組むこと４カ月。医者が「もう、薬は入りませんね」と、意外に早い治療の終わりを告げました。

だからといって、以前のような表情に戻ったわけではありません。毎日様子や表情を見ていると、抗うつ薬を飲まなくなったけれども、「うつ」の状態から完全に回復したとは思えず、また体調を崩したときにぶり返すのではないかと危惧しています。加齢による体調変化など健康不安は解消したわけではなく、むしろ増加しますから、それを受け入れて日々楽しく暮らしていくことができれば何ら問題はないのでしょうが、そうはいきません。

また、東京に連れて来たときは、大量の薬を持参、どれが必要な薬なのかパニック状態でした。薬の整理からはじめ、聴力が極度に低下していることもあって、受診のたびに同行して医者に対応してきました。現在では、持病である高血圧の薬だけになりました。

うつ病で「死にたい」「死にたい」とつぶやいていた日々のことを覚えているのか、聞いてみました。鮮明に覚えてはいませんが、「死にたい」という気持ちであったことは事実のようです。

「どうしてあんな状態になったのだろうね」と遠い日の出来事のようにいいますが、やはり、早期発見と早期対応が功を奏したといえます。

義母は今、新しい環境のなかで、同世代の人たちとの交流を求めて、地域包括支援センターで週１回開催される「ふれあいサロン」などに顔を出すようになりました。

高齢化がすすむことで、いろんな予期しない問題が起きてきます。老親を抱えている人たち、あるいは自らが老いていく中で、だれにも等しく関わってくる事柄に他なりません。ぜひとも、一人で抱え込まないで、相談ください。また、身近なところで気がかりな人には声をかけてください。